

『羊の歌』「空白五年」

加藤周一現代思想研究センター研究員 猪原 透

【本章の梗概】

前章および前々章では加藤の小学校時代の学校生活が描かれたが、本章では東京府立第一中学校時代の学校生活が描かれている。小学校時代には「優等生」として学校的な価値観におおむね従順であり、家庭においても学校においても世界の中心にいるような感覚を抱いていた加藤であったが、中学校時代には学校的な価値観に批判的な「少数派」としての自意識を持ち始め、学校生活の中心から自らは遠いところにいるという世界観の「コペルニクスの転換」が生じる。それによって加藤は「観察者」としての生き方を身に着けていった。

一方で、日々の生活は渋谷の自宅と平河町の学校を往復することに終始し、「優等生」「反優等生」のいずれにもなりきることができなかった加藤は、映画や文学といった趣味を共有できる親しい友人を見出すことができなかった。また、受験に特化した中学校の教育内容と自らの問題関心のあいだに加藤は接点を見出すことができず、強い退屈を覚えた。そのため、この時代は自らの感情生活において何らの動きもなかった「空白五年」とみなされ、他の章で見られるような色彩感覚に富んだ風景描写もほとんど行われていない。

中学校で出会った教師たちについても、人間として好ましいと感じる教師は何人かいたが、そこから影響を受けることはほとんどなかった。ただし、例外として加藤は「ネギ」と呼ばれた教師を挙げている。「ネギ」は試験でよい点を取るという学校的価値観を無批判に受け入れるのではなく、自らが正しいと信じた価値に従う人格的な自立の重要性を説いたことで、加藤に強い印象を残した。「ネギ」の考えは大多数の生徒には理解されなかったが、そのこともまた「日本人の考え方は何か」という問題意識の出発点になったという意味で、加藤にとっては重要な出来事となった。

こうした例外はあるものの、教師との人格的な交流はほとんど行われず、中学校の生活を終えたときに加藤は解放感を味わうことになる。

【内容の詳細】

引用①（71 頁、改版 80～81 頁）

一九三〇年代のはじめに、東京府立第一中学校は、日比谷の旧校舎から平河町の新校舎に移転したばかりであった。しかしその新校舎には、本来の中学校ばかりでなく、あらたに創られてまだ校舎を持たない七年制府立高等学校も同居していた。また五年生の中学校に、「補習科」と称する一種の予備校も附属していて、そこにも二学年があった。新校舎の教室は不足、屋内体操場にまで学生や生徒があふれていた。〔中略〕そのなかで新入生の私たちが片隅に押しこまれ、小さくなっていたことはいうまでもない。誰からも相手にされなかったし、上級生からはむしろ邪魔もの扱いされていた。

(1) 東京府立第一中学校

・東京府が最初に開設した中学であり、東京を代表する（※）名門中学。加藤が入学したのは 1931 年 4 月。

（※）加藤より 5 年早く府立一中に入学した丸山眞男によると、1920 年前後に相次いで設立された七年制高等学校（中学 4 年、高校 3 年の一貫校）の、東京高校（官立）や武蔵高校（私立）の方が入学は難しかった（『丸山眞男回顧談』上）。

・1929 年 10 月にそれまでの日比谷校舎から永田町（※）校舎に移転。永田町校舎では七年制府立高校が同居していた。生徒数は、府立一中だけで一学年 200 人（補習科は数十人）。

（※）平河町（正確には平河町五丁目）は府立一中の最寄り駅。鷺巣力先生の御教示による。加藤は自宅のある渋谷から平河町まで東京市電で通っていた。



『東京府立第一中学校創立五十周年史』

・「自分の思い出としても、高等学校は、わが青春の最もよき時代です。だけど、一中というのは、あまりよくないのです。印象がよくないし、自己イメージがよくない。うまく言えないのだけど、典型的に生意気な都会っ子で、プラス優等生。さぞかし感じが悪かったらうと、今でもそういう自己嫌悪があるのです」（前掲『丸山眞男回顧談』上）

(2) 学生の扱い

・今でいうマンモス校であるだけに、小学校での受験勉強（少人数の進学クラス）とは学生の扱いも一変。「僕は今日学校へ行った。——ではない今日も又行ったのだ。第一中学へ、第十教室へ、今日も又第二番の席へと、何から何まで番号のついた学校へ行く。番号位人を愚弄するものはありはしない。丸で愚弄されに毎日出かけて行くようなものだ」（「ナルシスの手帖」1939 年ごろ、『青春ノート』VI）

・受験勉強が本格化する 4 年生と、新入生とのあいだには扱いに格差。

引用② (71～72 頁、改版 81 頁)

小学校では私たちの学級を中心にして学校全体が動いているように見えた。その上、私自身にかぎっていえば、家庭までも、子供を中心として動いていたのである。そこに私の天動説的な世界観があった。中学校とその校庭は、そういう私に、いわば「コペルニクスの転換」を強いるものであった。太陽はもはや私の周りを周るのではない。

(1) コペルニクスの転換

・地球 (=自分たち) が世界の中心で、太陽は地球の周りを回っているという世界観 (天動説) が破れ、世界の見え方が一変すること。

・それまでの加藤の世界観……小学校では学級を進学組/非進学組に分け、加藤の属する前者を中心に学校は動いていた。家庭もまた (とりわけ加藤の育ったような「教育ママ」のいる家庭では) 子供を中心に動いていた。

・新しい世界観……新入生の加藤は無数の学生のひとりにすぎず、進学を目前に控えた学生 (4 年生) のように重視されるわけでもない。まして (監督された) 試験でよい点を取ることを至上の価値とする学校的価値観になじめない加藤は、試験勉強に熱中する人たちを外から眺める「他処者」ないし「観察者」にならざるを得ない。

世界の中心にいる限り、世界を観察することはできない。中心から外れ、遠くから中心を眺める場所に移動したこと——「コペルニクスの転換」——によって、加藤の観察者としての立場が固まっていくことになった。

引用③ (72 頁、改版 81 頁)

府立一中は、その頃すでに、第一高等学校へ多くの卒業生を送ることで世間に知られていた。その受験予備校としての性格は、新設の町の小学校の入学試験熱などは到底くらべものにならない。もし一方が入学試験準備の職人芸であったとすれば、他方は工業的な技術と組織であったといえるだろう。教師のなかには熟練した専門家が何人もいて、上級の生徒を訓練し、下級の生徒は、新任の教師や「受験勉強」専門家になりきらなかった変り種の教師に任かされていた。私たちの受けた授業には活気がなく、その内容は退屈であり、休み時間には遊び場さえなかった。新入生は自分たちが半ば無視された必要悪にすぎないということを感じないわけにはゆかなかった。

(1) 一高に入るための受験予備校としての府立一中

・全国からエリートが集まり、一高を受験し進学することが既定路線。進級を留めおく「落第」制度も存在しており、昭和期にも年に数人は落第していた (ただし他校ほど厳しくはない)。成績不振による転校も珍しくなかった。

・「工業的な技術」によって生み出される画一的な学生たち

小学校時代の受験教育と比較すると、規模、組織化の度合い、水準の高さが顕著に異なる。ただし、画一的な規格品のような学生が生み出されているという皮肉も込められている。

(2) 「専門家」教師と「変わり種」教師

・全体の見通しをもたず、与えられた仕事と目標に専念する「専門家」と、そうした仕事と目標に疑いを持っている（しかし表立って反抗することはない）「変わり種」の対比。

・受験勉強が本格化するのは4年生に入ってからで、それまでの教育は新任の教師や「変わり種」の教師に任されていた。彼らは後で出てくるが、自らの学識と受験教育のギャップを感じ、受験教育が「退屈」だという認識を加藤と共有していた（と加藤は感じていた）。

引用④（72～73頁、改版81～83頁）

そういう環境のなかで、私は同級生のなかに二つの違った型の反応があらわれるのを見た。ある者は運動競技に凝って、学校の授業を無視するようになった。〔中略〕またその頃「軟派」とよばれていた少年たちも少なくなかった。宝塚少女歌劇に夢中になり、例えば少女歌劇の主題歌をくちずさみながら、動作もなよなよとして、女のことばかり話していた。〔中略〕「軟派」の少年たちは、総じて、私にとっては、あまりに成人でありすぎたと同時に、またあまりに子供じみてみえた。女が男に化けたり、男が女のまねをしたりして、性的倒錯の味を楽しむことができるほど、私はまだ成熟していなかった。そういうことのできる連中に私は感心していたが、また他方では、彼らが教室で簡単な問題にてこずっているのを見ると、幼稚でつき合いかねる、とも考えないわけにはゆかなかった。私は彼らとある程度までつき合いながら、決して彼らのなかに友だちを見出さなかった。

(1) 「反優等生」の2つの型

(i) 運動競技に凝り暮に熱中し、「学校の授業を無視する」学生……硬派

(ii) 宝塚少女歌劇に夢中になり、「女のことばかり話」す学生……軟派

・丸山眞男は府立一中の学生を「優等生」「不良」「反正統派」に分類（前掲『丸山眞男回顧談』上）。加藤の時代にも不良はいただろうが、視界に入っていなかったのかもしれない。

・丸山は「反正統派」のなかに友人を得ることはできたが、加藤は硬派・軟派のいずれにも友人を見出せなかった。「軟派」の生徒とは一定の付き合いがあったが、浅い付き合いに留まる。加藤は勤勉でない人間を好まなかった。

(2) 「親友」をつくれぬ自分をどう見ていたのか

・「問題はむしろ周一少年の側にあったのではないか。少年は頭の悪い生徒を「幼稚でつき合いかねる」と軽蔑していた。だとするなら、彼の方こそ〈飛び級〉で入学してきた鼻もちならぬ秀才として毛嫌いされていたのではないか」（海老坂武『加藤周一』）

・「自分から欲しささえすれば、話相手に困るわけではない。彼のかい謔に富んだ早口は面白いものであるし、何でも遊びごとなら大抵心得ているから一しょにいて退屈することがないので、友達の間ではむしろ人気のある方かもしれない。唯親友が一人もないのである。

〔中略〕しかし真面目な話でも茶化してしまい、無理に迫れば忽ち嘲笑し去るのでは親友の出来るはずもない」（「寒い風景」1937年ごろ、『青春ノート』I）

引用⑤ (73～74 頁、改版 83 頁)

もちろん教師のいうことに全く忠実な生徒も、多かった。「一高・東大をめざす」学校の方針をそのまま受け入れ、学業に励み、遊びごとはほどほどにし、なかにはあらゆる科目に申し分のない成績をあげる完全な生徒さえもいたのである。〔中略〕その「完全生徒」は中学校の五年間、常に一番の成績を保ちつづけていたという。私は今その男が、その後どうなったかを知らない。私が覚えているのは、「完全生徒」が上級生になったとき、軍事教練で分列行進を指揮していた姿だけである。鉄砲をかついで並んでいた私たちのまえに立ち、大真面目で、全身を緊張させながら、剣をふり上げ、号令をかけていたその姿は、私にはひどく滑稽に見えた。

(1) 「優等生」の肖像

・優等生/非優等生の峻別……府立一中では成績上位 10 人までが「優等生」で、襟に徽章を付けることになっていた (前掲『丸山真男回顧談』上)。競争意識を煽るための仕組み。

・与えられた方針や価値を「そのまま受け入れ」る。その方針がなぜ/何のために存在するのかを疑問に思ってはならない。

・「軍事教練」……煩瑣で無意味な儀式的動作を大真面目に (=その意味を疑わずに) こなしていることへの滑稽さ。

「完全生徒」をはじめ大多数の生徒は (成績は別として) 優等生であった。加藤は少数派であり、一步引いた位置から眺めている (観察者)。

引用⑥ (74 頁、改版 83～84 頁)

しかしまた聡明で、興味に従って学んだり、遊んだりしながら、学力抜群の生徒もいた。私と同じ学年にはたとえば、矢内原伊作もいたはずだが、私がその頃直接に知っていたのは、後に友人になった矢内原ではなく、新教徒の家庭に育った「ゴリラ」という生徒であった。「ゴリラ」とよばれていたのは、体格が頑丈にできていたからだ、体力のみならず、知力にもすぐれ、禁欲的で厳しい正義感をもっていた。宝塚少女歌劇の歌をたえずくちずさむ生徒には批判的で、歌そのものさえも嫌っていた。私は彼らと彼らのくちずさむ歌を嫌っていたわけではないし、いわんや彼らに対して怒りを感じていたのではない。私は「ゴリラ」を尊敬し、しかし彼との間にうちとけたつき合いを育てることには遂に成功しなかったと思う。

(1) 同級生の肖像

・矢内原伊作……哲学者・評論家。のちに親しい友人となるが、当時は接点がなかった。

・「ゴリラ」……藤田惇二のこと。中学一年生のときに席が隣になったことをきっかけに知り合う。新教徒の家庭に育ち、後述する「ネギ先生」への敬意を共有。一高在学中に早逝。

真面目かつ受験体制にも批判的な「ゴリラ」に加藤は共感するが、禁欲的であり、宝塚少女歌劇を批判する点には共感できなかつた。『青春ノート』に書かれた追悼文でも、「ゴリラ」との親密な交際はあつたが、映画や文学への関心を共有できなかつたことがうかがえる。

「その頃の私は浅薄な合理主義者で、素朴唯物論者であった」という加藤は神の存在をいっつも否定し、肯定する「ゴリラ」と喧嘩にあることもあった。「否定は肯定よりも常にたやすいものなので、肯定する方から見るとやり切れない。惇二君のやりきれない気持ちを私はあとになってから色々の場合に知った」（「私の見た惇二君」1938年ごろ、『青春ノート』Ⅱ）

引用⑦（74～75頁、改版84頁）

府立第一中学での私は、多くの同級生を知り、また彼らを通じて多くのことを覚えたけれども、ほとんどひとりの友だちをも見出すことができなかった。〔中略〕私は、同級生相互の間にも、また教師との関係にも、人格的な交渉の入りこむ余地のほとんど全くない世界に生きていた。〔中略〕もし人生に空白の時期があり得るとすれば、私には、渋谷の家と平河町の学校との間を往復して暮らしていた五年間がそう見える。私は退屈していた。

(1) 感情生活における「空白五年」

・課外活動への不参加

府立一中には校内雑誌『学友雑誌』があり、丸山眞男も水田洋も隅谷三喜男も寄稿しているが、加藤は一度も寄稿していない。卒業時には卒業写真を撮るが、そこにも加藤の写真は見えない（鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』）。

・「空白五年」の意味づけ

「僕の感情生活は中学校の空白五年をとびこして、小学校から高等学校にじかにつづいている。従って僕は中学校のおわりまでの歴史を幼稚園と小学校とで一応すませなくてはならなかった、若しすませなかったらあとの空白五年は僕を奇怪な小児にしていたはずである」（「日記—14. 11. 28」『青春ノート』Ⅵ）

中学校時代への嫌悪が、自身の幼少期の位置づけに微妙な影響を与えている。

引用⑧（75頁、改版85頁）

府立第一中学校の校歌には、「議堂の高塔仰ぎつつ」生徒はよろしく大志を燃やすべしという意味の、実に皮肉な文句が含まれていた。私がそこに入学したのは、大日本帝国の満州侵略が始まった年である。学校ではもし生徒に大志があれば、議会を無視しろとは決して教えていなかった。忠君愛国ということは教えていても、基本的人権という言葉さえも教えていなかった。〔中略〕たしかに校長は、生徒を講堂にあつめて、演説するとき、好んでグラッドストーンを引用していた、〔中略〕しかしそれは英国人たちが誰でも知っているように、英国人民を代表してヴィクトリア女王を屈服させた宰相の話ではなく、自ら信じるどころに従って行動せよ、といった風の処世訓にすぎなかった。誰がいったにしてもそのこと自身は議会政治と全く関係がない。たとえ英国の議会政治と何らかの関係があったにしても、平河町の中学の教室の窓からみえる議事堂と関係のないことはあきらかであった。

・「議堂の高塔望みては 輕世の大志胸に湧く」（府立一中 53 回卒業生寄贈歌：梁田貞作曲）

(1) 社会への関心

・満州事変が起こった1931年に加藤は府立一中に入学。「議堂の高塔仰ぎつつ」と歌いつつも、府立一中の教育は議会政治の崩壊に無関心であった(と68年からの視点で位置づけ)。

・「忠君愛国」は教えても「基本的人権」は教えなかった……現に存在する秩序や権威への忠誠は教えても、それらを超越する普遍的な価値については教えられなかった。

(2) 川田校長のグラッドストーン

・校長……加藤が入学した当時は川田正激(写真右、32年まで)。イギリスのパブリック・スクール、特にイートン校を模範とした学校運営を試み、学生による「自治」の重要性を強調した。川田校長時代に落第生の数は大幅に減少しており、受験一辺倒の人物だったわけではない。しかし、イギリスびいきの川田においても現実の天皇・民族・国家を超越する視点はない。

・グラッドストーン……ウィリアム・グラッドストーン(1809～1898)。イートン校の出身者で、同校で数々の逸話を残している。4度にわたって内閣を組織し、ヴィクトリア女王にもっとも嫌われた政党政治家として有名。



(3) なぜエリートが戦争に流されていったのか

現実の生活と接点を持たない外来知識は、天皇・民族・国家を越える価値とはなり得ない。「私は開戦当時の艦政本部長岩村清一から「ブリッジ」を習ったのを思い出す。彼はイギリス史から挿話を引用して、話をするのが好きであった。〔中略〕しかし話がそこで終らないのは、大学で「英法」を習った多くの知識人が、たちまちファシズムと戦争にまきこまれていったときに、これらのイギリス崇拜者たちがまきこまれなかったという事実である。「英法」を習った知識人たちは、家庭で「ブリッジ」あそびはしなかった」(「戦争と知識人」1959年、『著作集』7巻)

引用⑨ (75～76頁、改版85～86頁)

私は教室で退屈のあげく、その「議堂の高塔」を眺めていたことがあった。秋の空は窓の外に青く澄んで、校庭の落葉樹は美しく黄葉していた。「ああ、また秋が来た」と、私は無意味なことを心の中でくりかえしていた。すると突然「なぜ窓の外ばかり見ているのだ？」という教師の怒った声が降ってきた。私はおどろいて我にかえり、同時に、どういう風の吹きまわしか、勝手にしろというすてばちの気分につえられた。「調べて来いとおっしゃったから、調べてきました」と私はいった、「わかってしまったことを聞いていても、意味がないと思います」「ほんとうにみんなわかっているのか」「では訳します」といって、私は英語の教科書を訳しはじめた。「訳はまちがってはいない。しかし授業中に外を見てはいけぬ」と若い英語教師はおだやかに同情するようにいった、「他の諸君のことも考えないといけないからね」。

(1) 外の景色を眺める

- ・窓からみえる景色の描写……月並みなもので、感情生活の乏しさを示すものか。
 - ・外の景色を眺めること……授業への消極的な反抗。しかし課題はしっかりこなしている辺りは「反優等生」になりきれなかった加藤らしい。
 - ・『向陵時報』(1938年11月11日)に発表された「小品二つ(アドバルーン/童謡を唄った青年)」には「中学生の私は英語の時間中に、窓外のアドバルーンに気をとられていたばかりに席を窓際から暗い廊下よりに移された位である」という挿話がある。
- 『青春ノート』にも、窓を眺めていて教師に叱られるが「教師が何で怒っているかよく解かる。要するに馬鹿々々しいと云うこちらの気持ちが先方様に程よく通じたのである。〔中略〕こちらの気持ちが通じる以上、お話の馬鹿々々しさは成程教師自身心得ているのだ。それを生徒が心得てはいかぬと云う法はあるまい」(「ナルシスの手帖」『青春ノート』VI)という挿話がある。上記のエピソードは、これらを組み合わせたものかもしれない。

引用⑩ (76頁、改版86～87頁)

その教師は、東京帝国大学の英文学科を卒業したばかりで、市河三喜教授を崇拜し、わかりきった関係代名詞がどこにかかるかを説明することに、彼自身退屈していたらしい。もと「明星」派に属して歌もつくり、詩も書いていた江南文三は、私たちの学校で英語を教えていたが、退屈をまぎらすのに、独特の方法を用いていた。〔中略〕また白髪の漢文の教師はもっと正直だった。「これから論語を読むが」といいながら、「これは諸君などにわかる本ではごわせん」と宣言した。そして一行読む毎に、私たちにはほとんど全く通じない感想をいつまでも独言のように喋っていた。「この字を簡野はこういって居るが、簡野などにわかることではごわせん」。——しかし簡野道明にわからぬことが私たちにわかるはずはなかった。

(1) 新人、あるいは「変わり種」教師の群像

- ・学識は豊かであるが、その学識と教育内容のギャップに苦しんだ人たち。わかりきったことを説明することに彼らの退屈しており、その退屈に加藤は微かな共感を抱いていた。
- ・若い英語教師……若林秀喜。1929年に東京帝国大学英文科を卒業。彼の崇拜する市河三喜は日本の英語学の権威。
- ・江南文三……与謝野晶子と共著『花』(1910年)を出している詩人・歌人。退屈を紛らわすために、英語の文法を「キャラメルについての文例だけで説明してみせた」。
- ・白髪の漢文の教師……渡貫男(右写真)。漢詩文・書画に通じた文人。簡野道明は戦前の漢文教育の権威で、簡野への批判は自らの学識への自負が言わせたものか。渡には漢詩文集『寧固軒小草』(1936年)のほか、いくつかの中学生用漢文参考書を出している。(以上は主に前掲『加藤周一はいかにして～』による)



引用⑩ (77～78 頁、改版 87～88 頁)

中学校では教師がほとんど例外なく、あだ名でよばれていた。そのなかには頭の禿げた配属将校を「テカ」とよび、鼻の先の赤い図画の教師を「ネギ」とよぶように簡単なものもあったが、またなぜそう呼ぶのか説明し難く、しかし人物の印象を言いあてて見事なものもあった。たとえばその頃の教頭は「ドブラ」と言われた。〔中略〕英語が受け持ちの学課だったが、もうほとんど教えてはいず、ただ自分の編んだ読本五巻を、一年から五年までの生徒に使わせていたのである。その読本は「これは万年筆である」という程度の初歩からはじめて、上級になるとヴィクトリア朝の散文の抜粋にまで及んでいたが、選ばれた散文は毒にも薬にもならぬ道徳談義のようなものばかりで、そこにはただひとつの恋物語もなく、警句もなければ、皮肉も、逆説も、あの有名な英国人のヒューモア《humour》さえもどこにもなかった。〔中略〕

「ドブラ」とは違って、もう一人の英語教師は、機げんのよいときには素晴らしかった。〔中略〕「ドブラ」は嫌われていたが、この教師は親しまれていたし、尊敬もされていた。尊敬されていたのは、廊下で外国人の傭教師に出会うと、彼だけは「英語で話をする」ことができるから、というのであった。「英語で話をする」ことは、私たちにとって、常人には全く期待できない神秘的な能力であり、教室で英語の話を読むこととは何の関係もないことであった。

(1) 二項対照による教師群像の描写

人間として好感のもてる教師もいれば、そうでない教師もいる。尊敬できる教師もいれば、親しみのもてる教師もいる。そうした様々な教師群像を加藤は二項対照によって違いを際立たせながら描いていく。

- (i) ドブラ ⇔ 「もう一人の英語教師」 学生に嫌われた教師/好かれた教師
- (ii) ネギ先生 ⇔ テカ 学生に不可能を求めた教師/求めない教師

(2) 「ドブラ」の肖像

- ・どぶねずみ+rat をもじったあだ名をもつ教頭。本名は岡田明達。
- ・英語担当の教師で、自身が編纂した5巻本の英語読本（『ニュー・ダイヤモンド・リーダーズ』1930年刊）を生徒に使わせていたという。

「小学校・中学校を通じて、教育者が私に与えた本の中で、殆ど再読に堪えるものがないのは残念である。殊にあの英語読本、リーダーと称する愚劣低級浅薄な、恐らく世の中に存する最も白痴的な本と過した長い時間を想うとき、残念というよりは憤然、憤然と云うよりはむしろ暗然たらざるを得ない。ハムレットから英語を学ぶことが出来たらそれらの時はどんなにましであったか！〔中略〕ただ私には、今ハムレットが必要である如く、小学生や中学生のときにもそれが必要であった。従って必要なものを与えぬ学校と教育は無能であった。話はそれだけである」（「教育」1942年ごろ、『青春ノート』Ⅷ）

内容の退屈さもさることながら、それは受験以外の何の役にも立たないように思われた。

(3) 「もうひとりの英語教師」の肖像

・府立一中では英語教育に力が入れられており、英語教師だけは一般の教員とは別の教員室が与えられ、外国人教員も二人いた。

・にもかかわらず、「ドブラ」はおそらく外国人教師と会話することができなかったが、もうひとりの英語教師は会話することができた。そのことは「神秘的な」(＝自分たちがそうなれるとは想像しがたい) 能力で、「教室で英語の話を読むこととは何の関係もないこと」。

引用⑫ (78～79 頁、改版 89 頁)

図画の教師に学校のなかでの影響力のなかったことは確かであろう。しかし高木先生が私たちにいつも穏やかな態度で接していたのは、そのためでは決してない。「私は諸君を子供として扱わない、責任ある人間として扱いたいと思う」とあるとき高木先生はいったことがある、「だから私は試験を監督しない。どうか不正をしないでもらいたい。みていないところでも、正直に行動してもらいたい。教育の目的は、不正を妨げることではない。不正をしようと思えばできるところで、不正をしない人間をつくることだ、その方が試験の成績などよりどれほど大切かわからない……」。しかし生徒たちは監督されない試験に慣れていなかったし、慣れていない事業を共同でやりとげるのに十分なほどの連帯感ももっていなかった。試験の結果には、不正な写しがまじっていた。

(1) 「ネギ先生」の肖像

・白髪頭で痩せた図画教師。本名は高城次郎。加藤が一年生時のクラス担任。

・「いつも穏やかな態度で接した」のは、体罰や落第の恐怖による強制で生徒を従わせるのではなく、生徒自身が自らを律することを望んだから。ただし別の回想(「ネギ先生の思い出」1951年、『自選集』1巻)では「寛大な憐みの表現」と、ややニュアンスが異なる。

(2) 「監督なしの試験」という思想

・入学して最初の試験で、教育の目的は「試験に監督を必要としない人間」を育てることにあると述べ、実際に教室から出ていった。生徒たちを、権威や監視による束縛がなくても自らを律することができる「人格」の持ち主とみなし、試験の監督は「人格に対する侮辱」と感じるべきであること説いた。

・しかし、ネギ先生の試みは(ある意味では当然だが)失敗に終わった。

「東京府立第一中学校の生徒には、「人格に対する侮辱」を侮辱としてうけとるだけのはっきりした人格の観念がありませんでした。そして学校の教育方針は、監督された試験で、「またおそらく監督された人生で」よい成績をあげる生徒をつくることにあり、その試験に監督を必要としない生徒をつくることにはなかったのです」(前掲「ネギ先生の思い出」)

多くの「優等生」はネギ先生の意図を理解することができなかった。彼らも小学校時代には「修身」を学んでいたが、修身の基礎は外部の権威に従う「忠孝」で、「人格」を基礎とした倫理とは全く異なる。

引用⑬ (79 頁、改版 89～90 頁)

私は今も、そういう答案の束を携えて、教室にあらわれた白髪の高木先生を、忘れることができない。「諸君は私の信頼を裏切った、残念です」という沈んだ声が響いてきた。〔中略〕試験を監督しなければならない教育は、教育ではない。しかし諸君のなかの何人かは、私の信頼を裏切ったばかりでなく、正直に試験をうけた諸君の仲間をも裏切った〔中略〕。そういって高木先生が教室を去り、しばらくすると、校庭の方から「ネギ、ネギ」と叫ぶ上級生たちの声が聞こえてきた。しかし教室のなかでは、しばらくの間誰も席を起とうとせず、ものを言う者もなかった。

(1) ネギ先生に対する (同級生の) 「裏切り」

- ・加藤は身近な人、連帯感をもつ人に対する「裏切り」を恐れる (『続羊の歌』『広島』)。
- ・前章では「優等生」である自分が仲間を裏切り、本章では「優等生」である同級生がネギ先生を裏切った。このことは「優等生」を生み出す受験教育への批判意識を強めていった。

(2) ネギ先生はなぜ失敗したのか

- ・「ネギ先生は〔中略〕 どうして監督なしの試験をさえ成功させることができなかったのでしょうか。〔中略〕 学校のなかでの問題は、ネギ先生の失敗を説明する窮極の理由にはならないだろうと思います。では、なぜわたくしの中学校は試験の成績ばかりを気にしたのか。なぜわたくしの小学校は権威への服従を説き、しかもネギ先生に勝る説得力を持つことができたのか。つぎの問題は、当然こういう形で出てくるはずですよ」 (「ネギ先生の思い出」)

「不正をしてでも試験でよい点を取りたい」と思うことは、学校の問題というよりは、それを (暗黙のうちに) 奨励する社会の問題。

- ・敗戦後に加藤がまっさきに封建的地主制 (日本の貧困) と「天皇制」の問題を取り上げたのも、学校的価値観が学校の力だけで生み出されたわけではないと考えていたから。

- ・「あの瞬間」を除けばネギ先生からの影響を受けなかったとされているのも、教育の力だけで学校的価値観を克服しようとするネギ先生に違和感を覚えていたからではないか。

- ・しかし本章ではネギ先生に対する違和感よりも、ネギ先生への連帯感をより強調する形で提示 (「ネギ先生の思い出」から『羊の歌』までのあいだに意味付けが微妙に変化)。

引用⑭ (79～80 頁、改版 90～91 頁)

一九三〇年代はじめの中学校には、軍事教練のために予備役の下級将校が配属されていて生徒に歩兵銃の操作や分列行進の仕方を教えていた。「テカ」はそういう配属将校の一人で、ながく学校につとめていたために、軍人であるよりはむしろ一種の教育家になっていた。彼は生徒の心をよく理解していたし、決して私たちに不可能をもとめようとはしなかった。〔中略〕彼は決して生徒を殴らず、またどういふ生徒に対しても、どこかに温情とでもいふべき思いやりを決して失わなかったと思う。そのために私たちの方でも、彼には一種の親しみを感じていた。

(1) 「ネギ先生」との対照

・「生徒の心をよく理解し」、「不可能をもとめようとはしない」教員担当（予備役軍人）の「テカ」（高橋準造中尉）。1925年1月から府立一中に勤務していた。

・「テカ」は生徒の人格を尊重したわけではなく、予備役軍人として「温情とでもいえるべき思いやりをもって」監督。大多数の生徒たちはネギ先生より「テカ」に親しみを覚えた。

引用⑮（80～81頁、改版91頁）

その頃、中学校には年に一度師団司令部からほんとうの軍人がやってきて、中学生の軍事訓練を視察した。その「査閲」といわれていた日が近づくと、テカの次第に興奮してゆくのが、私たちには手に取るようによくわかった。〔中略〕私たちは彼の教える煩瑣で無意味な儀式的動作にうんざりし、そんなことに暇をつぶすのを、ばかばかしいと覆っていた。しかし「査閲」の当日には「テカ」の名誉のために、一日だけ本気になり、全力をあげて走ったり、行進したりした。

(1) 「テカ」との連帯感

・年1回、配属将校の所属する連隊の連隊長が、配属将校の力量を評価するために学校を訪れる「教員査閲」が行われていた。

・「煩瑣で無意味な儀式的動作」に多くの学生がうんざりしていたが、「テカ」の名誉のために1日だけ真剣に取り組み、やりきったときには満足感を得た（⇔連帯感に欠けていたために失敗した「監督なしの試験」）。

引用⑯（81頁、改版91～92頁）

平河町の中学校で私は多くの教師に出会った。その大部分は有能な専門家であり、また何人かは好ましい人物であったにちがいない。しかし誰からも——おそらくあの瞬間の高木先生を例外として——趣味の上でも、人格の上でも、あるいは話が少し大げさになるが、世界観の上でも、私はほとんど全く何等の影響をうけなかった。同級生とは人なみにつき合っていたが、夜を徹して語り合うことのできる友だちには遂に会わなかった。小学校を出たときには、後ろ髪をひかれる思いも残ったが、中学校の過程を終わったときの私は、ほとんど解放感を味わった。しかしその解放感について語るのはまだ早すぎる。

(1) 孤立した中生活と「観察者」加藤周一

・「あの瞬間の高木先生」を除けば誰からも影響を受けず、親しい友人を見つけることもできなかった。自分が「少数派」であり、学校的価値観の「余剰者」であることを自覚させられた。

・しかし加藤が孤立に苦しんだという描写はなく、ただ「退屈」を覚えたことだけが述べられる一方、周囲の状況に対する観察が淡々とつづられる。「田舎」での「宴会」と同じ身の処し方（＝「観察者」として自己を位置づけ）を身に着けた時期として「空白五年」は位置づけられる。

(2) 「日本人の考え方」への問い

・与えられた秩序や価値に服従する受験体制への反発、「ネギ先生」に教えられた「人格の尊重」、そして教育内容への失望は、自由な精神に基づいて信じるに値するものを探し求め、それによって自分自身を教育することの必要性を加藤に教えた。

「私は今も、嘗ての私の教育者を憎くではない。のみならずその配慮と愛情に対し、ある部分では懐疑的だが、とにかく感謝している。ただ、彼等にあきらめをつけて、遂に自分自身を自分の精神の教育者にするようになった私は、彼等を尊敬していない」（前掲「教育」『青春ノート』Ⅷ）

・自由な精神に基づく人格の重要性が意識されればされるほど、自らが少数者であることが自覚され、同時に日本人の大多数が与えられた秩序や価値への「忠孝」に道德の基礎を置いていることへの違和感も強くなっていく。「ネギ先生」の失敗はそうした「日本人の考え方」に対する問題意識の出発点として位置付けることができるだろう。